プロメテウスの犯罪

大庭みな子

人間が原爆をつくり出したということは、人間がプロメテウスを讃える歌をもはや歌えなくなったということである。あかあかと輝く火踊りの栄光が、黄泉の国の彼方へ遠のいたということである。人々は、ある日、突然、誰かが狂気になるかもしれない怖れを、原爆に結びつけて考えなければならなくなった。人類が原爆を製造してしまった今、人類は気紛れな人間が、気紛れに原爆に手をのばすのではないかという不安に脅えなければならなくなった。

原爆後の世代は、原爆を落とし、原爆を使用することを阻止できなかった世代を恨み、軽蔑して育った。大人というものは信用できない。現代の世の中がこんなに絶望的になったのは、すべて大人のせいだ。世界中の海と、地球そのものの土壌を汚染し、かけがえのない地球を棲息不可能な汚れた灰の塊りに変えようとしているのは、もとはと言えば、原爆を製造し、しかも平気でそれを使ったあなたがたのせいなのだ、と子供たちは言う。

しかし、ともかくも原爆はすでに使われた。だから、私は自分がそのとき、それを見て、その証言者となれる記憶を、今となってはむしろ大切にしたいと思っている。私は十四歳のとき原爆の惨禍を見て、その記憶が私の人間を全く造り変えてしまったと信じている。

原爆の話に入る前に、終戦の年の情況を少し話したい。終戦の年、十四歳のわたしは、広島から汽車で一時間ばかり東にある西条という町にいた。女学校の三年生だったが、学校が広島被服廠の分工場になっていて、朝七時から夕方六時まで毎日ミシン作業をやらされていた。入学して一年間はどうやら授業があったのだけれど、二年生になってからはほとんど毎日防空壕掘りとか、教練と称して分列行進のようなものばかりやらされていた。そして二年生の終りから遂に学校ごと工場になってしまったのだ。私が

教師を憎むことを、大人を憎むことを覚えたのはその頃からである。

当時は学校の先生の大半も軍国主義者だったし、奇妙な論理と倫理を頭の固まらない幼い子供たちに教えることを誇りに思っている人々が沢山いた。ものを考え始める年頃の私たちがこっそり読む本を、彼等は厳重に見張り、まるで憲兵みたいに身体検査をして、自由主義的だという理由で教科書以外の本は特殊な本を除いてすべてとりあげたのである。彼等が気に入っている特殊の本というのは、天皇か、天皇の名による聖戦を讃えたものでなければならなかった。そんなわけで、恋愛小説の愛読者であった私は常に、この身体検査の犠牲者になり、屈辱的な叱責を受けなければならなかった。不良少女だとか、非国民だとか、時勢を何と考えている、とかいった理由で先生たちはかわるがわる私を呼びつけ、なかには暴力をふるって、私の頬に平手打ちを加えたりもした。

私はそういった大人たちのことを子供心に狂気だと思っていた。そういった狂気の人間に対する、恐怖はその後も長く私の心の中に残っていて、今でも自分の娘に、世間には狂気の人がいるものだから気をつけなければならない、と教えることにしている。そして、もっとおそろしいことは、社会がこうした狂人を容認していることが多いということである。

一方、私たちは毎日のように空襲を受けていた。西条は大した軍需工場もない小さな町だったから、爆撃を受けることはなかったが、近くの呉や広島をめざすＢ２９の編隊が毎日のように頭上を通りすぎ、ばらばらと爆弾を落とすのを麦畠から眺めていた。どういうわけか、私たちはあれほど毎日防空壕掘りをやらされたにもかかわらず、ただの一度もその防空壕には入れて貰えなかったのである。防空壕の数は少なくて、工場の幹部とか、いわゆるＶＩＰしか這入る余地がなかったからなのである。

そんなわけで、私たちは空襲警報になると麦畠に待避させら

れ、銀色に輝くＢ２９を、雲雀の巣のある麦畠の中で眺めていた。一九四五（昭和二十年）の晩春から夏にかけての思い出はくる日もくる日も麦畠で寝ころんで見上げたＢ２９の銀色の翼につきる。

夏になると被服廠の仕事はだんだんひまになった。はっきりした理由は伝えられなかったが、材料がまわって来なくなったからである。ミシン作業はなくなり、ずっと昔はね出した製品のボタン穴とかボタンをつける仕事だけになった。私は今でもボタンホールをかがることにかけては一流の職人並みだと思っているが、これはこの頃の経験がものを言っているからだ。

原爆が落とされた朝、私たちはそんなふうにボタンの穴かがりをやっていた。私たちには明日を語る話題がなく、「戦争に勝ったら」とか「戦争が終ったら」とかいう言葉さえ無意味な、あてのないものに思われた。「戦争だから仕方がない」というのがたったひとつの現実味のある発想だったのだ。

突然、奇妙な閃光に私たちはびくりとしてボタン穴にさしこんだ針をとめた。それから、どーんという不気味な音がして、地球全体がゆれたように思い、顔を見合わせた。みんな屋内にいたのだが、そんな奇妙なめまいに似た光を誰もがいぶかり、それに続く爆音に好奇心をかられた。空襲警報の通告はなかった。だがそのうち誰かが窓の外を指さした。それは今まで見たこともないむくむくと無限に湧きあがるお化け茸のような七色に輝いた雲なのである。それが、今の閃光と爆音に何かの関係があるということはわかったが、いずれにしても、それはかなり遠く、方向から言って多分広島市あたりではないかということに意見が一致した。

作業中であったし、見まわりの先生がやって来て、がやついている生徒に静かにするように言ったが、みんな窓からその茸雲をみて口々に喚くのをやめなかった。やがてみんなの意見は何かの爆弾であるには違いないが、それは今までの普通の爆弾ではない、ということにまとまった。なぜなら西条から広島とほぼ同じ

距離にある呉に連日のようにある爆撃では、こんな奇妙な経験はいちどもなかったからなのである。

この騒ぎは不安なままに昼近くまで続き、やがて、広島から続々と到着し始めた生証人たちの口から、その新兵器の惨禍が語られると、町は異様な恐怖につつまれた。「戦争は負けじゃ、もう、なんといっても負けじゃ、何もかも終りじゃ」全身血だらけの、無惨な肉塊といった被爆者たちが喚きながら汽車からころげ降り、広島に近親者や縁者を持つ町の人々は血の色をなくして、どうしたものかと、右往左往した。ただの爆弾ではない、怖ろしい新兵器である、きっと、ヒロシマは実験に使われたに違いない。そんな囁きが人々の間にひろまり、それが敗戦という想像につながったが、被爆者でない人々はそのことに関してはまだ固く口を閉ざしていた。

八月六日から十五日までの十日間の町の話題は全てヒロシマの惨劇に関することばかりであった。私の下宿していた家には広島の市内で医家を開業していた主人の弟一家が怖ろしい火ぶくれの形相で辿りついて、のたうちまわっていた。

そして敗戦である。

敗戦後一週間して、広島市周辺の学生たちは原爆の廃墟ヒロシマに救援隊として動員された。学校工場は敗戦と同時に閉鎖され、私たちは、いや日本国民のすべてが毎日を虚脱した状態でうろうろとしていたときである。

私たちは久しぶりに汽車に乗った。というのは敗戦間近の空襲の相つぐ日々には、汽車に乗ること自体が困難で危険を覚悟しなければならないことだったのだ。

広島は文字通り瓦礫の原と化していた。それは地上の風景というよりは、黄泉の国のごみ拾場、あり得ない天体の茫漠の原といった方がよかった。私たちの配属されたのは爆心地といわれる相生橋に近い本川小学校に設けられた応急救護所だったが、その作業は救護というよりは見学のために地獄に招待されたピエロの役

割りといったほうがよかった。

実際、そこには手をほどこすすべのあるひとかけらの希望もなかった。当時、そこに収容されていた三百人余りの被爆者の大半にはほとんど正常の意識もなく、身寄りの者もなかった。またたとえ身寄りの者がここを訪ねあてたとしても、火ぶくれの魚と変身した、そのうごめいている肉塊をどうすることもできなかった。彼等は一人残らず、確実に死ぬのである。私たちはこの本川小学校に九月の初めまでとどまって、毎日炊事作業をやらされたが、一日も欠かさず、日に十人近くの人間が救護所の中で息をひきとった。

死体は校庭の片隅に掘った穴に放りこみ、火をかけるだけである。折り重なった死体は雨の中でなかなか燃えず、絶えることなく死体を焼く煙がくすぶっていた。

私たちは屋外の瓦礫の原の、とある場所に水道管の切れた所から噴き出る水を見つけ、そこで米をといだが、米をとぐ白い水の流れる瓦の間には、無数の白い折れた箸のような人間の骨が散らばっていたことを覚えている。されこうべのかけら、肋骨、脚の骨。人間の骨と灰を踏まずに当時広島の街を歩くことはできなかった。

ときには腐爛した半分黒くこげた死体に蠅が群らがっているのも見た。蠅、蠅、蠅。蠅と蛆は死体ばかりではなく、まだ息のある人間にも群らがった。収容所の患者のえぐれた傷の溝には、すき間なくびっしりと白い蛆がうごめき、身動きすると、蠅はもの憂げに舞いあがり、ふたたびその血膿の上で手足をすった。

私たちはその蠅と蛆に覆われた患者の間を縫って、雑炊のはいったバケツを持って、柄杓でそれを配って歩いた。生きているとは名のみの、腐爛しかかっている患者たちの多くはもはや食欲もなく、口走る言葉は永遠に醒めない悪夢の中の呟きでしかなかった。

私たちは単にあの茸雲をほんの少し離れて、遠くからしか見な

かったという偶然の幸運から、いまだに正常な顔かたちを持ち、正常な脳で考えることのできる、別の人間だった。同胞でありながら、手をさしのべることのできない無力な傍観者でしかなかった。

聖職者であるならば、こういう場合、祈るのだろうか。このとき、私は人生において初めて宗教というものについて考えた。そして、私は非常に漠然とだが、そういうものの無意味さを悟ったのである。これは不思議な経験である。私は沈黙し、言葉を失い、川原に出て水を眺め、涙を流さずに、人間の行為に哭いたのである。

十四歳の私は、もの心ついて以来、戦争の中に育ち、戦争を正当化する狂人たちを指導者とする日本という国に生きる以外に術のない無力な子供だった。私は雨の降る太田川の川面をみつめ、死臭のただよう夕ぐれに、ついこの間まで、本土決戦、一億国民の総玉砕を叫んでいた大人たちの狂った顔を思い浮かべた。あの蠅と蛆に覆われた被爆者の中にさえ、そうした考えの持ち主はいたかもしれない。

そして不思議なことに極悪非道な鬼畜米英といった言葉を、この残虐な新兵器、原爆に結び付けてることは、つい先だってまで、日本中にあふれていた好戦的な人々の口からとび出すにはいかにもふさわしいものではあるが、この冥府に似た廃墟をうろつく犠牲者たちにとっては、無感動な意味のないものだと知ったのである。

これは裏返された報復に過ぎなかった。日本の指導者が最初に原爆を持っていたら、彼らは間違いなくそれを使ったに違いなかったから。そして、そのことのために私は哭いた。

人間の知恵。火を盗んだプロメテウスは今や太陽を造り変える術を学んだ。太陽を司る魔術師の呪文が、ある種の人間の脳を狂わせないと誰が証明できるだろう。広島は天災に見舞われたのではなく、あきらかな人間の意志によって、人間が人間の頭脳で造

り出した破壊の威力を証明するために選ばれたのである。原爆の投下に反対した人たちはアメリカの内部にも沢山いたという話である。しかもその人たちの声は殺された。

考えてみれば、原爆だけではない。人間の技術は次々に人間を殺している。その怖ろしさを承知で、そ知らぬ顔で、緩慢で大量な殺人を実行する近代的な工業と、それを黙認する人々がいる。ブロメテウスが火を盗んで以来、人間は放火という新しい犯罪を生んだ。広島は放火された街である。ゆらめく炎の美しさに酔う異常心理が、原爆投下を決定した犯罪者たちの背後にあったことは確かである。

広島市は原爆投下後三日三晩燃え続けたというが、終戦直後の広島の街は蠅と蛆の街であった。猛火巨煙の中をずりむけた皮膚をひきずって逃げまどった人々は、火の消えた石の上でうずくまり、蠅の群れに襲われて息をひきとっていった。そして今もまだ病床で死を待つばかりの原爆病息者があるという。

私は原爆投下のその時点で広島市内に居住していたわけではない。ただ終焉に近いヒロシマの目撃者というに過ぎない。だが、ともかくも、あらゆる種類のヒロシマの証人は、その記憶を語り伝えるべきだと思っている。数限りないこうした語り伝えが、人類の神話となるなら、それは唯一の救いではないか、と思っている。

もし、人間たちに、ヒロシマの語り伝えを神話にするほどの賢さがあるなら、原爆の鍵に手をかけるかもしれない狂人を幽閉することに命を賭けて闘わなければならないと思っている。

そして、人間は原爆を持っているという理由で、もはやどんな理由があろうと、戦争は正当化されないのだということを知らなければならない。

（一九七三年　作）